



伊地知文庫
文庫20
351
1





伊弉知氏善冊

長共文集元亨秋書ふときこころし
 集編ありるをれらの号とやうそ
 名とふむせしめたりこれハ延宝ふはまり
 へ寶永ふ終るその間共んをあらうとあ
 するの故ありしとあるふ普子の滅後
 さいりつてきれ人乃家ふ何りともあれ
 といてきしも正徳より今延喜子まで
 ふこれも又共んを終りき何とてその名
 乃久しきとえうけ集れ世ふがれ
 なるものこゝ又國ゆらるるを

おこしなるおほん神ふつふ大徳のまかり
た代の物このこと多く何つあもは
中にけ書もこの法何まらるるま
あれたまをてあてまのぬまにぬら
小娘うくひぬ心の治連もゆいけつ
法垣をまの宮奴の杖の骨は福の
をもいふまらぬあまのわらわら
まをのつらあまの志まらるるま
まのまの縁を求めてまらるるま
あま大徳にまらるるま
くものいせまらるるま
も端をかくてまらるるま
まらるるま
人まらるるま
まらるるま
先師のまらるるま
まらるるま
この法はまらるるま
まらるるま
福のまらるるま

よはらふはたねを彼家ふゆへに
るを度とてのまひかひあけさう
うそて夜通船り度ふ七日すて
らちさうはかし者のこもたうら
さしよもあてたりらんかりしてあ
しつらよりこひますらひもてかゝる
よみの紙と申よまありかゝるさめふ
某稿のやうよあなる本のまじり八
十八を一冊とせるものよそそ子れ
自澤今あまふらうこひさうら
あしつらよりこひますらひもてかゝる
らしめかひさうかゝるらうこひさ
うもとあまふらうこひさうら
しめよりのおおさうと櫃よかま
うかゝるこひさうらうら城といふ業
をうそて紙れ下ある魚を画くこと
とて一巻をさうとてうらや梓
一世の吾子をあらう人とうら
さしよもあまふらうこひさうら
侍りぬ

百萬坊音原

五元集

延室

天和

貞亨

元禄

室永

室晋齋ハ米元章の硯の裏に
鑄入をうら号し三季子其硯
を予不何しん室井晋子や
いそ此号はくくかつりそ
筆すすに本ぬるをやそ
中玄龍の額を需てる月の



軒葉よりけり
延寶乃く桃青門より
より室室の万歳をいひ
いひるまふきりなり

具角

五元集

四十の賀一はる深まで

泚秘存し墨を抄せて梅状

遊大音也

んめくくえん食の家も能く

加列小松観音寺奉納

梅のふ且辨を待て庭あり

芭蕉翁のゆけりあかし

うりて繪潜をとけり

せめてあふく柿よんめのふ

曉

をよみ圖をりてやむめのみ
不曲亭

あせを顔目あても梅の匂ぬ
こつとりとほめておの梅
あつりやく枝のさけ目や梅のみ
宰府奉細

守梅乃夢のついでに野老賣
和心水推敲之句

そらく梅よの月みり梅の門

梅津氏 如祖又大坂

表の軍功よりと

沛感狀 沛た刀をた戴

せう海正月十七日のおとや

快井上抄傳にたす家の

十七人としあめぬおつて

とも正月十七日後同の真

何と其家督執権と

けあめぬあ

幡おを文臺服やむめのみ

元り高踏管あつし
の
を
祝
こ
り
あ
ら
ま
し
め
し
め

夜光る梅のつらさや貝の玉

仙石を改守との可なり
力満くあひぬ玉葉を
沸梅中と伝ふとこそ

外様と手向の梅を御こり

元祿十三年二月九日

聖廟八百齡 御社 忌能
為 戸 御社 為 幸 連 誦 令
興行一社

梅松やあつむる数も八百所

氷肌玉骨と云ふ

昔こゝ花のあも梅の皮

久松肅山身よて

梅空く花岩の星乃白あけ
百八の目と遊や園の人ち

芭蕉庵をよめて

号やナリとて甲一んや
うらみあよ葉教ん色にあや
腕押のつせあふあよ梅乃為
葉本れあけいと是あやこの梅
葉の力を並りはつとて

うらみすといておきく杉狭

茶白のふりつる縹み

号代水は色を何より日山

茶折るもむせきる縹み

うらみすの曲る枝を削る

号ふおあらし いきかへる

うらみすやを祓ふうらみ

市隅

竹とらして皆あふり竹尻

うらみすや 蕙子やうらみ 蔭子の世の秋

長嘯の祀は遠きあの秋

とてあやゆらしてあはに

佛をまじりあはに

いふれやあはに

あはに

のうらみ

おのうらみも無下み

正月巳巳布施の奇や天

詣りて奉納

玉椿昼とみくしてや布施

梅津硯水會ノ

窓柳やれと掛かころひぬ大塚中

正月廿三日冠里公ノ侍を

葉刻ニの上ノ手ヲ握ル蕨ノ糸

接木ヲ画テ

来オおせるノ中ニ継ガやスつシ

十一日

お汁粉ヲ還城樂ノことト掛

糸清ク不帶ミさせセやニ蕨

漸覺春相泥とらハ切ハ旬

削リけ膏藥ハありノ鼻ハあれ

畠ウらハ江ノ中ノよシちハありト

二ハんハ一ハつハのハけハあハふ

あハつハもハ前ニちハもトあハこハふ

百人ノ雪搔志トしハ芥ハちハと

五葉志トしハもハ朱雀ノ柳ト也
侍リ所ノうノのハりハまハをハ

きハひハこハハハ西ノのハ虎ハみハおハひハり

とハけハこハもハ聲ハよハ旬ハつハるハ芥ハちハか

七種ハのハめハせハふハ舞ハのハ松ハと

あハいハやハ下ハ松ハよハうハきハおハ鳥

砂植ノのハ糸ハ葉ハもハあハりハおハつハふ

溪邊双白鴿

浦小鴿芥梳海流り赤
うすく水やりつるよ笑る芥のふ
一糸ハかゝるき海より 枕草
石下清まなほやむす規
白魚や海苔ハ下迄の買合せ
以ふやせ何もさゝ海もの里の味
白魚ハ漁翁の齒よあひ味
白うたの罾の何うはしむる
陽空や小磯乃砂の味を
あゝあゝ

河別八尾
姫

あゝあゝ

こゝろのあゝ女房もせん水祝
衆庸入懐の夢をひらき
引つせと松をくいのちの嵐をか
寶引小切半の角を多く也
帯せぬと津はまはま 踏みの宴
難儀人神の神を祈りて七
句をせ海中小黒取を以
にせりせとを標ひよつ送
年神子標の口をく小推り

三月正當三十日

昼成

山吹も柳の糸始はくそ
鼻中あま目鏡や臆月
禮うや太神宮一つ
省と務や天氣定めて様下

格枝縹馬合子

こよ〜斯虫あえ〜ら 稻荷山

禁固ヲ破リて暇ヲ玉ルコ

破や見惜い銀花父乃〜免

はきり

や入やきり〜あその是を星

故赤穂城主浅野忠府監長矩之舊

臣大石内藏之助等四十六人同志異体

報亡君之讎今茲二月四日

官裁下令一時伏刃齋屍

万世のほ〜つり黄台録ひる〜

肺肝を〜めく

〜ら〜さ〜あ〜げ芥子酢ハあ〜る〜

富森春帆大言子葉林傍竹平

これ〜ら〜名ハ焦尾琴〜も〜孫

あ〜ける〜

黠印半面美人の字を彫て琴形
の中ニ備へたるをほしき冠里の
万句の市巻ニ押弘めゆるとして

春の月見子お書はしぬ

悼後立老 初音ハ女

昔うれ初音三井さまたま

題水

ちく下河まは水や夜の髓

昼贖

拾ほの風巾子うらむや玉篋

家みけお席る水くおる寺

き納

金柑や冬青よはりも稲笹山

蕨入やうらあはるうら等

やみや牛合おし大系を

元祿丙子のうらむ月まつみ
ほ芽うらうら出山さあまひゆり
畠中の梅のわつえん又六分斗
ある蛙のかくもをたつて賭り
草茎なまうらとあうらゆる

草茎を包む地もあま雪アラス

胡牛豆うらほりり 柳うら

御忌

人の世や乃らうある日流るる林

本多徳品公まで

是れおやまげの鞭のゆめはう

河州川波舟

河上六柳うんめり百中を

柳一ふ敷もこすまもは

搦手や柳の曲をつつふ 狙

市川才牛追善

一子九翁名成つき傳ふ

塗顏の足ハあうや雉の色

菜苑

黒地麻てこをあぬら土争

春るやひきよめハ柵はド

多能ありたり

園の春のちりあはれは梅の袖

新三十三間堂

名妙や子のの翁のまはり

青柳子梅梅つふあたる世

柳上詠の園子

はるごと梅の影の影は柳の

形城の賢あるふけ柳の影

春雨

鏝り立してつふあはれ雨あは

はるふあはれあはれ日あは

二月廿五日の上京後記

西河の死出流を旅のちりあ

はるあはれあはれ波岸は

佛若大晦日入満あり
ひうふ仏ともえんちやてす
へきうくあなまのこめさ
往生もあそのまをた
佛もふんくうの花おひあふ
山里の名もあつしや佐指法
神尊の盆とんさうり妙光賣
と丁あうまを大元の里ひさう
野嵐のこれさうあひこく
竹のまや柳をさるぬ落のまう
梅のまはしよふさう

二月十七日京驛

了也の勝都のちまふんて巻ん
おぼらとま松の黒さよ月おふ
数焼の比を都の居を何て
一指よ玉子をさる人ん
りつるや音の玉あ十とあむ
南都の何とふ雨
傘や薪のぬの何とあむ

無車馬喧

夕日新町やあむこてあふ

見獅子伶有感

了も志多や柳子の器の君とし
蝶とともを猿をもよひし系を
芸宗層のみをいひしことあ

秋葉

聖堂のこほせく蝶の袂の
百とせぬめり葉乃こころあ

柳燕圖

しるのあをさうこらに柳紅

茶のあはをさふあしと里蕙

画はし

蕙やかろく菓を由几中

階子うらとあはすあつぬ

海面のねをけりきさ津ハめ

傘子あかさうとあゆ燕

賤やひをうあられと夕日

うつくしを教く雉の距う

くうと雉をさうむる大の壺

角田川よて

あはれも真子を忍らう雉乃壺

海草すく水の急すめ都を

小田のす嶽も柱やのこる層

高のこゝろの江に星の敷
ちんちん蝦もさるる洞う糸
帆柱のせみよりおろすき雀外
苗体や度迄ハゆるる暇傳は
とぬおろし俵子海寸小橋外
景政り片目をひろよ田螺う糸
みれば海もさるる子

孫も乃蚕や一およ日向外
春面や葉のまよ酔ふの尾端

泊陸岩城子暹留し
錢糸ののりあきを恨むる
よし笑ひ伝ふし子

松をぬや嵩り江世とも叶席
南村千羽仙翁のこゝろ

乃春や花を越つ乃志貝
富士乃踏すのそまは侍り

三帆舟ハ塩尻あなるる江
少なきあさりしる梅乃小枝子
鵲の足あをんちを人こゝろ
白をすあけるつあて

梅の色をこゝろや鵲のやめあて

いせのきしき
夕げとあはれ
馬も出るを
傀儡師の
傀儡師の
傀儡師の

四睡圖

うけりあまぬも
新や虎の耳

三品小酒井村
就音寺

おき論や
新もこの
辰春日

或むるふ
祢う比
無を
任
住
さ
五
の
法
を
感
に

能睡

煖か所嗅
おたぬあり

能忘

かり
一
ま
七
月
か
つ
て
雨

能捕

勢うと
氣の味を
回ては

能狂

陽
火
と
志
さ
り
子
お
た
心
け

能聴

疑
の
あ
る
め
お
も
う
し
花
心

自注

蝶を囓る子猫を紙る
心うふ

足跡をうつまゝの猫や雪の中
猫の子れくんつわられつた蝶の

市間喧

片げ本巻の舟なる足跡は雨聲

を越酔帰のやぶの内で

かひあふらん 春の夜の女とふ家くすあふ

宰府系譜の舟中

葉のふ乃小城をみ南あふらん

醜子桃李のるく 籠白

鶯の獅子よほくく逆毛の

王子曲のやぶにたれて

あ唇を烏帽子あふせん若く

曙やまに桃李の鶯の声

初夜を小桃やああ城の脇踊

傳く耳を雛の室や延長時

たてのこや盗まぬ雛ハ松浦舟

おほれよ木老もあつ雛は炎

雛やまの基盤よ、おろしけ

三日月の宮あけけ

ひふやその佐野の口りの香の袖
既のひふ清水坂を一目の香
折菓子や井筒まゆて雛のしげ
雛の子は宮殿くみゆしける

永休島八幡さまを初

汐干やせきろくあそとまれ次市貝
釈あそむ比目を踏ん汐干や
絶國の朝約つきてと汐干りふ

第酌

まどろや雛子菊く小盞
曲あ子所の氣違ハ茶碗か
菓子か魚よけし人形せ桃のふ
曲水や寛海くはる宿なるも

錦さうして祓ひおさうらる雛の息
くろくを雛も懐め虎の母
雛くれせ人を初衆の棧姿か
緑豆の尻も白く桃の眉

須澄ハよハふおむちより合
貝そろへをさうしけふ
蛤の〜もはさむら玉柳

乃露云あつ〜く市浴養の比
大あんけのむぢら〜しよ〜
作あ〜を〜の市書と
は〜ける〜

那息ハ何のふおれと山後

露沾公市庭とと

森ゆらよ又らん月のお梅
縁うらこあ〜思あや花の庭
地神あむの外と〜松さ〜り
花さん母まつれ〜り盲児
いさ〜小町〜姉の危〜〜に

黒谷まで

万ののりせらるる花 逢梅

仁和寺

いふ戸のまらふあめ梅

上野まで

涼師で扈從さんあ梅

妙鏡城より花送

文の初は梅片一もは侍

花中尋友

饅頭を人さしりまゝ山梅

一巻を袖上りと招れ

初梅天物のついで多きせし

友猿の友まゝいすあ花衣

三月廿日 合安亭

山あまふ侍依

市近習や花のこあしあを

門柳花をほくおれ

うぐひす啼

市用より下児うすあ花の

矮屋毒奴の膝をりし

たよりをい心まある酒を吞て

傀儡の鼓うつなる義ん

石河氏宜雨公の山居
羨景を何つちて四方の四の
水情をまておしめさる

二節の乃ハ角豆ハ山はく

護國寺よりあそぶ

さしをむくささ

白雪やもよゆり顔ハ嗔哉

立石をあらせ

比身ありく主と下人に花衣

京よりくもんの山をりて

花よ遊く歌道よましく都の

寝よとすれ棒つき由も山

表中
面上右西湖

山極猿を放し梢のま
もあそぶの礎よりつら
初冬物くく友ハあはる

付座

初よりと表書院と日月代
もよ来と都ハ幕の盛れ
葉盛るてあはれし夫婦
もね盛るく一踏るくもあ
世はあせ五津己あはれ

目黒松隣堂にて

浮世床を替りて嘆き山はぬく

越東殿山三寸

小坊言や松よりくられて山楢
八寸は乃山女さくらや一況に
人を人を恋の姿やとふよを

茅野山あらし

明星や楸片くくれば山うつく

おとす殺生偷盗あり

何とくと花子五戒の楸山

行房云々と唐庭の花を語り
けりてはあはれなりと花を

花をほん使者のおたす月を

ぬき万をを依りて

そのもよあはれをさくやあ益

酒のちうあはれをさく花を

あはれ

ちあはれ清味みせを塩楸

惜花不掃地

赤奴落もよお藤ゆるり

西存

さくらもろは生五り八たすれや

上野一清水堂めて

待りけこ志るも盛のちくち
ちる花や路はをへる足心

日論の傍と遊の

も酒傍も候ん塩を
一食千金とや

津西の何五あるせん出くつ

辛未の春上柳よあさる日

門主薨御のよをあきて世上
一雨し愁眉ひそめ

其生とあ二日そや

花より待てこのきあく喧嘩買

上野一御

わたり徒士に立る出乃花ん

尋花

梅木屋の亭に苗をこもいおん

遊と味は

車あて花んをんや

茶室をきせて以合ん人を誰
酒を毒あを毒の毒らん
此雨よあはぬ人や家乃豆

王維山水
寸馬豆人

永代寺池色

池を吞犬耳入あひ花の松

南盛さうめて上京よ

礼と濃伊勢を仕まつる裏後

大悲心院の花をて作りて

灌頂の園よりわてて樹木

茶もさひよけ晩鐘を山嶺

おとくも花の間乃せうねふ

望月盛や銚子の屋初さう

ゆきの山を

樹を

海棠の花のうや花月

小冬居は花雪の群りてし山

月香子山吹屯の素顔よ

亦是より木を一えけつし山

後咲と櫻く小日をかそへたり

旦夕あそひぬちむるはし山

おれや籠わゆる花の柳

心ちす序終れんをよ岩つ

よ伝あらんぬ石の五徳や後花房

白飯を酔みとみつふふ常

海州川邊

親のまはら山乃流や志ぬら

錦のちも後の風と情

三月十二日合安亭の花
あつ下花よりして

植足小三切の供や

甲く入相

けくと花乃名おや笄扇

秋航をちと替るる

あそくや後極るる扇元

龍樹菩薩の禪陀伽王の對て
貪欲を志めしめしむるもへん
右瘡人近猛煙始雖悦後増
苦の又のそらを

雁瘡のいゆる時ゆる

十割止親子

一目之羅不終ゆる得鳥之羅
唯是一目以又のそらを

ゆるるる忍は

意馬心後の解

立馬の曰を猿猿心

雜司右少将

梅のそ白くあれ
かりせき入しあ
おろしゆのそを

山里ハ人をあつたの花ん外

口の三嘯云侍従あをりて

宝永二年三月廿七日

宗使より多らぬあをを祝ひ

後辰や廿七人茶屋より

芭蕉の自画十三徳周之讚

師の師乃十年志し柳陰

いふをやあやねを喜ぶも時智

有明乃面起すやねくおん

淀丹のあもそそし 龍云

夜這星のつるもや子規

官城

歴々や下るの折し一時を

河東

川おろしむるを愛へり子規

鶯啼やけあふすを 郭公

暁の春雨を吹くや 郭公

石間長屋子

時多人の懐くんと下水有
不観一二の橋乃おぬふ
既咸の三味線走り一何有

似廊

時多あつて子傘を買せり

赤折山

夜下り子け襦あつた敷船
子ねこの用さ日月の時多
寮坊主のおのハ所 ちとむた

庐山雨夜

宰府七子納

和子子付多居くと越子多

林中不賣薪

せ子ふくや山時多所たう子

はる江さふ村あて

くあ山村場の日陰や時多
禁る五加わくを何とまは

曲絶人不見

曉の反吐いさあり、 歌と
時多りれや崩おひくれきん

あもあまに花もあます時を
母をおくれ侍りてこの
あまゆめのこゝろを

あまの母をうらみ、
松風あつ戸を侍りて
あまのこゝろを

あまの同妹あまの世を
兼あま

蛤乃やうきてはまや母とまき
それよりしてあま鳥や郭公
黒滴を硯よ奇の所を

白文

人々の四月よりけを郭公
時を茄子のこゝろの小糸が

うらみあまのこゝろを

郭公懐きあまのこゝろを
自清て腰ぬけぬ言や郭公
六所法院あけてあまのこゝろ

浅井さ樹下

虫つあまね杏子あまのこゝろ
葉をめて画れぬ梅や郭公
あまのこゝろあまのこゝろ

時を人なを馳走し寝ぬおれ
目の上も目をくくや 子規

夢昼

砂の目も福芝を流し給ふ

姉の噂の野史忠切者心を

きりりゆきして禄をぬりて

起てきけけ何事市云お記

佛さへこの世にふくむしきよ

志つてやけおいせれおん

夢餓や母よきりせそはしる

風光別我昔吟身

大酒よ起てものきき給ふ

却るゆきよきぬきききや衣又

一ひもろよ給ふぬや黒木くま

卯月八日母よおくれて

力もあつて衣もくまきう月以

慈母墓

初めおきわしあつてるあは

上りさ

灌佛や控ふおれきあの児

つみぢ白合子

年々一りそりそあおのぼり
殿つらり並ておやー桐の家
メのそあや

うりぬのや異見み咽ふ牡丹
りよーは北あはるその牡丹指
河品親心寺

楠の澄ぬるりーあらん
筑前を

あゝぬ火の院まらる牡丹

雨意 艶まめめてい

ハセをさうつ、みりあらん
池田の梅棠子背柏のた状を
あつめて集あらん
さしてりし用み火とよはらん

下宿卯りお中の一日

隠岐殿のくまんとやせ後山

あま百里全阿南登号
上京のめ三十三日の夜

室永用元奉節使
侍侍美の人のあま

とーぬ氣て伴せと誰うあらん

屏風に菘房の位すつるの茶
送ひ子共三位よあこめる

長湯を原たら家は紅色茶
貢のふく奇なりとて

桐のむ新渡の鷲將 不言
愛娘子

鶉啼て玉子吸蚊ハあつる

席令初めて上京の饒

涼こと都のそや 連や金

楊州霍

護国寺よあそふ

水漬は目こちやや 牡蠣

うきんりりきくあふ二河佐也
葉の味も何りきりきり
魚おけあよ提東家杜あ

七子納

あゝれ流り流やうけて杜あ

田家

あこめは足何りきく娘さ
汁獨よ笠のつくやあ田家

木質入湯のころ

まろ〜とやお苗のうらさるるのり

袖裏や茹かりけふ白く重
舟より北均を吹や夕暮あ
卯あや蛸うらふのたけくす
ふのあやいつきの湯所のかげ

寄幻听長老

老僧の笥をかむあうら
筆と竹ありからよ大阿し
竹の尻をおきゆや五月圍

腰下魚寸鉄

筆や丈山あまの 鎗の鞘

素堂居

叶の戸ハ皆喰ものそまの叶

楓子居

其叶や家ハくれて湯用草
夜ふや橋臺えして何通り
目通の罟の根や葉はうら
吐ぬ鴉のあむまもあな海山
粉まつれて一里ハあり 岡の松
争たぬ忘れ耳やうらあを

画興

戸塚師存らよ

禊祓の初ハ己日の辰者ハ
帆をかり舟ハ禊り碇くれ
夕塔やあのみよあし中少々
あしすり通る時

世中を去るはこい小祿うと
敬節の體あつて都外

おきし詩よ

伊せあつても松魚あつて酒定
こよらまの石ハ昔まをぶら外

呈高江公餞

篋木や人言へつる五月雨
けしこれやまの介を通る人
顔むらよ田子のもよそや五月雨
けしこれやまの土の煙乃を屏風
かよもあや傘あはる小人形
さしこれ酒匂てなると初茄子

巖窟院殿乃大法るを

東叡のよねまはる

夕日初のまも休むる法の色

市譯吟

言舟とわらる 鯉やけのを組
ああやめのの何むらうちる 尻外

公門子入時

あやめとくゆり 隣子乃こころり
磯泊を沼まな いら 昔うそ

うよせけああやめもあやめ
うりぬま宿を ああやめ
やもとおほふぬ 信あれし
新のうらみありと 伴せ大浦
家のうらみありと 伴る

昔を 蛙のつらま 阿やめ外

けあやめをさうさくは白装
二色の羽をわすれておとあ
ちやとあのことうとあのとまは
とあの人形のは俗とあはま
かきああとりあ人形はあし

新町 坊主あまや 花葛

五月三日 家あし

屋根青と並てあける 昔あ

あひしああ女の塔の灰あし
かきうしああ

山毎の糍やせめて湯あく

峠のさやいしとああのみひ糍

本庄し夕しを志めて昔亦

五月十三日

雨をやはも酔日乃くあつめ
藤の葉や金魚よくるいさる

酒満

葛のも乃酒興童もも二面

青嵐のりふ歌を

海松の葉もふ杉の葉や初瀬山
蝙蝠の尿もふふれあやめ
交代の葉守の跡や初拍
疱瘡の折阿ふいをこみ懐か

緑槐 高處

ちのせまや笛よはるをそ十文字
あつらひ酒の肴も這せり
漁舎やむしーの角下好牛
くわめてや升よ生もくも
文七あまのちのちのちのち

河原町あり

毒り家あつらよあま告やん
字作よそ

川くまや水よ二重のちんちん

うつせこの橋よ

葦虫の暮あこりねるる命

谷中

風あを森のつやうん

傍るる君

後しらす貝少く借あらん

下やこや鳩根性のあくれ声

高江公溜池の高岡よ

たしあてし涼を扱とる

夏ふよ我ハ御着とるる女外

幸都宮入道

蓮生ハあハよやぬを虫拂

揮脳よ代をゆるりその鑑う

よめり世し時の花う土用

控くや木村まうけて土用

浴衣着て尻貫まは袖ま

粗公 溜池ま

尻むいて猿まらりするあつ

水飴まういらを化のつ

干尻やうつむけてあま

尻のあまもろてよ流れ

亀毛の鱗

此の皮笠ハ重とりは国々

破扇の圖

羅光り扇架く持し扇は
鳥飛餅の何れ子の何れ子
紅よりちふのわさ乃白た
せと啼や木のわたりる園より
隣りくは木にくむやせとの色
竹のせとけらよ志何の時
あうそやせとも雀も好を程

白雨や内併あかく物語り

巾着白雨とらふ歌

香もあつりよ腥
白雨やもりをむねを嵐の子
ゆめは地め夢あつくはるま
夕立よひよりかきるやうか

中嶋三遠の津糸あそ

雨をすりまのあつり
夕立や田をえめつらの津糸あそ

翌日雨あそ

舟中吟

はうに乃箱はのあて里急

うらみす

西行と師花城の馬山
幸北をた原をつも
見んくのかつ
土月のり
常木の

鳥のこもむく人よ

青柳やつるに
みこのちや
略焼ハタ
麻村や

或人の位者
そまひけす

夏のおを吉
夜のお
生死去来

鳥のこもむく人よ
捕虎 未坡

七ッ色の
か
故を
りやり

更閑

石灯 翁好屋よ消り 移舟よ

しきけさよまぶらんせうと

うちんあさねはらうさめてほ

切れしつら多ハ減り 蚤の詠

旅店

ふまの雪蠅ハ酒屋子孫りり

あうん大あうんつを二あうん

刻て盡しけいおん女さうのま

内いれよ塗してわらわはあうん後

をりせしむるをのそむ

清水 秋本子 白う面子うありり

形 目鼻あさこさんのおうこ

浅草河 歳々吟涼

舟人 数舟をれえしりては

川原に 顔子泥をる 旅りあ

涼まつお安育や上総子舟いあ

すーさや帆子 船匠のちも髪

舟暑し 配りぬのそく 園の顔

午んうらよを 欄干や 橋はん

涼ーさや先弟 旅野の 流星

舞退之捨酒吟あは

酒ちうは舟をうーやむ涼あま

こゆゝ

此碑て八江を哀まを螢か

牛御前

是や皆雨を波人ちすみ

橋上休老とりあ髪

牛泥む老の齒くまや橋は

船を玉子てましくあしお

海を見て凍む角あま鬼尾

餞久松肅山

筆をさしに歩まやうま下凍

くわあま

あつらふ藤てつむり刺ゆあ

画讚

大塵垢の布袋の指のゆく所

日移よあつらふのしん

十八の明神つまよはみみ

河原あま

燈を牛はくすまみ車ふ

は松よりくま風ありをまみ

勘當の月あまあま凍ま

遊子殘月

暑字 けいさつ

むら雨のも舞よ通る雲も

呈餞 露江石

供この鞘の暑もや岡の松

人また暑の影あは 端啼を

自棄

きらうぬくお起昼寐久は

五月十日雷雨永代島の

茶店中 やさし

ゆきより神唱時て 難の蓋

住吉のそ西露く 夫敷雅修

せー時よ 居ん くのそを

護のあも 二百万の輝あ

七十余の老踏つてのりて

善のらまをけるその

いまそよりけは

おるんあ

かりいよ

なりま

ゆる

六尺も力あ

村田菴

年このま秋中江のさ社よ
すめあさる靈仏天神一を
さうり可なりて興廢の市
威祝ありんたる中一の色
時の用情ふらこのの席て
れをうりて官督罰するの
くいり暑をさやむに霍
乱虫氣のしをりもあつ増
ふくにゆめてけしお行程の
遠山をけ番みりうまて

ゆりてと世を振舞水の下向る

秋天あちこちとに

夕影よあをぬきけを賣名号

昼影よ米搦涼むる也
故のの白を結まうせて讃
のそむるをその結ハ夕白
乃高有書しりりるとたひ
ゆるや一自句を半ゆる

夕影や一白乃とすよの宿

逐歐陽公賦

蠅のよれ兄子舜あ子に憎みか

昼讚

暢臨の小遊さふしに車百合
子共肩とらつとと進交早

市中芳

魚市涼宵

揚貴妃の衣ハ活しる裸も

七月七日靈衣を感て

東湖の海方天は待たず

出処を金不欺くれども蓮が

荷切や下ふの一切を荳角

高仙貫之の古風よ

冠も指をそふり糸乃汗

衣院七葉あつて

周知といふや世世を交の海

上下と裸の万端みは

あはれもよりあつて

あはれもよりあつて

舞や麻のちりも垣根に

とやうなやうな

まゝに軍勢うら

さんおしませ

増分や一ちす

鬼のやう

くも

呉例

介抱せ

い

糸草も合養性や

瓜畠

瓜守や桂の生例

越前の人の土産をよめて
光廣つるのうらをわりい合たり
櫻井のえさふとを神て掛

元角田川牛田とらふよて

いそつと法あるこころよまの橋

舟船よゆとつて

貫之の館のすくよりりまふ

さあんげのうらを扇よ居れと
生の松とつとつとをよた

木角物とや染引味を志し送り

市原よと

虫とむと朽木の女町干ねり

手よとあも林檎ハ油て面白
百日乃あくらあやや洗ひ程
四糸よ弱のけあけや心てん
乳のぬえ法あもとのあふ

七日

絆まのる人の子ゆらもあふ

山王の氏あて

新等と天下あや 土くま
番附をくらもあの子ゆら
松原よ田をよあ 昼休と

其瘦み能因一りもか食し
と食み天比を看るる夜衣
高閣挽凉

香蕩散わうあつてまの草
物幅より活のさしや一是
瞬をりてあまらん

うきし舟の涼ふゆか子の甲
あそりどく蓮の片そよぶ節
大雨大風

吹降の合羽りそよぐ雨後か



11月14日

11月14日

